多聞天立像

四天王の一人である多聞天をかたどったこの像からは、静かな怒りが伝わってくる。これは平安時代（794〜1185 年）の仏像の特徴である。多聞天は願いを叶える宝珠（如意宝珠）を左手に持ち、中国風の矛槍を右手に持っている。宝珠は、実利的な願いを叶えることができるという多聞天の能力を象徴しており、槍は悪を退け、仏教を守ろうとする多聞天の強い意思を象徴している。阿弥陀如来像と同じく、この像の胴体は一木造りで、10 世紀の後半から日本で広く行われるようになった寄せ木造りの様式でつくられた仁和寺の他の仏像とは、その点で異なっている。この像は、一体だけの独立した姿でも恐ろしい外見だが、かつては西方浄土の仏陀である阿弥陀如来の数多くの脇侍のうちの一体として、仁和寺の本堂に祀られていた可能性がある。多聞天は四天王のうちでも最も力が強い。四天王は世界の中でそれぞれ受け持ちの場所があり、そこを悪の影響から守っている。多聞天は北の方位の守り神で、すべてを聞き取ることができ、傘またはあずまやを持った姿で表現される。四天王の残りの 3 人は、東を守る持国天、南を守る増長天、そして西を守る広目天だが、それらの像も阿弥陀如来の脇侍として、多聞天とともに祀られていたのだろう。